

〔昭和十四年 春陽会第十七回展〕展評
 ・『日本學藝新聞』 昭和十四年五月五日

春陽会展

佐波 甫

既成画壇には一般に蘇活の精神が漲つて来てゐる。一般的な雰囲気が既成絵画に息吹を与へたことでもあるし、前衛画まで追詰められたものが本来の絵画道に立還つて現世紀の初めから再出発をなすことが新しい芸術の体勢といつていいだらう。そこには新秩序を要求する全般的な芸術の姿がちらつてゐる。

春陽会にもさういふ所がある。だから従来の考へでゆけば、妙に中間の所で立留まつてゐるやうでもあるし、印象派に反作用的に發した別の流れが、象牙の塔に芸術を閉ぢこめ旧い芸術家タイプにみる作品のやうでもあるし、一方に味の濃い日本画（今年はさやうな俳画みたいなものは挿画に見られる丈だ）に赴き、一方にこれでもかと無性にタブローに厚塗りを誇つてゐるやうでもある。けれども二、三年前の沈黙が破れ、新しい意欲ともいふべきものが一般作品に漲つてゐることは、かやうな従来の見方では解き得ぬ謎である。

けれども春陽会型の残滓を指摘しない訳にはゆかない。いな一方に意欲

の発動がかやうな型を通して依然として示されてゐる。意識と造形性を欠いた無計画な、余りにも粗笨な厚塗りの芸術が今年もこの型となつてゐる。必要以上に顔料を駆使すること、暗色調の晦澁を誇つてゐること、澁刺とした輝きをかいま見ることは甚だ稀であるといつていい。画面に絵具を叩きつける旧時代的な芸術、氣難しい芸術であるし思はせ振りでもある。フォルムの脆弱、構図に工夫を欠くこと、敢えて一時代前の造型形式といひ切らぬ迄も、それ故にまた、前衛派の概念的なものより芸術性が高いともいへぬのは、そこにまた別の意味で人為的な概念的なものがこの形式の中に潜んでゐるからである。

春陽会は現実を追究しない——とはいひ切れぬが、少なくとも芸術の樂しみの中に現実を忘れるやうな所があつた。故に一般の絵画運動のすさまじさを外に悠々自適の感があつた。少なくとも二、三年前迄はさうであつたし、さうである所にこの会のよさも悪さもあつた。所が最近のやうに現実の追究が違つた姿を帯びてくると、ここも久し振りに元氣を取戻したやうで、画壇の反省的要素が春陽会の存在を浮上らせたといへる。

会場で優秀選手を求めると、二見利節、加賀孝一郎、土屋義郎、中谷泰、高木勇、津田正周、吉田達磨、木下公男、小泉倫之助等であらう。

一々触れる暇がないが、中川一政の《牧の郷》、木村莊八の《紅椿》のやうな快作に接すると、久し振りに春陽会好みを味はひたくなる。伊藤慶之助のアイヌ娘は、いつも凡庸な近代娘と違つた輝きを見せ、加山四郎は《百》《風》以外は題材と構成の喰違ひか脆弱に見える。鳥海青児の支那風景は

マチエールの厳めしさを脱しないが、この会のよき悪さを依然代表する特異な存在である。倉田三郎は小品に健在を示し、版画室では長谷川潔、前田藤四郎、野崎新右衛門が一脈の清新味を与へている。

倉田白羊、福井謙三の遺作、共に騒がしさを離れて、自然及び生への愛情を静かに謳はうといふ人々であつた。私は前者の三十歳時代の作を好むが、画壇の現在の反省期には忘れられたこれらの人々のよさが自ら浮上つて来る。後者のパリ時代の作品には伸びる要素が多分にあり、最近は失意状態にあつただけにその不慮の死が惜しまれた。



右 上 足立源一郎《大同石仏》
 右 下 石井鶴三《温泉》
 左 上 水谷清《毛皮の婦人》
 左 下 木村莊八《青椿》

春陽会 第一回展
 出品者 倉田 三郎 福井 謙三 野崎 新右衛門 前田 藤四郎 長谷川 潔 木村 莊八
 上右 泉酒 大石 同三 佛立 足上 三 下右 酒谷 水 青椿